

子どもと本の豊かな出会いを願つて

—国際子ども図書館開設準備の現場から

田中 久徳

はじめに自己紹介させていただくと、私は国立国会図書館の職員として、「国際子ども図書館」の開設準備に携わっています。「国際子ども図書館」といっても、ご存じの方も多いと思いますが、国立国会図書館の一部門として、「子どもの本」の専門図書館を上野公園の中に開設しようという計画です。現在、戦前の帝国図書館時代か

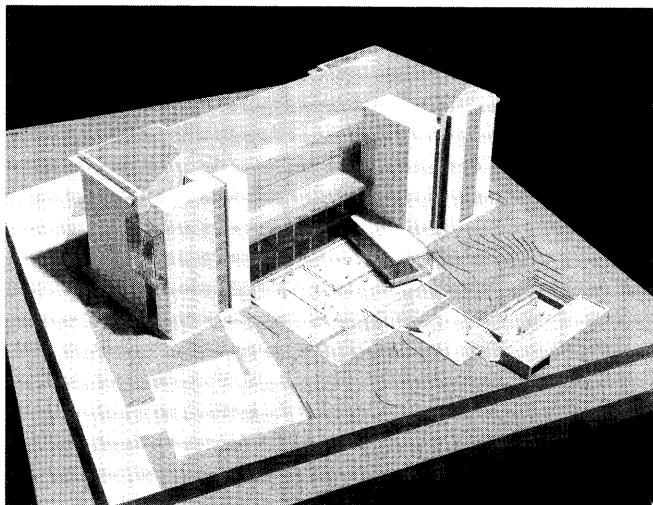
らの長い歴史を持つ、国立国会図書館支部上野図書館の建物（明治三十九年建築）の改修工事が進んでおり、建物全体の約三分の一の改修をおえるのを待つて、平成十二年度に部分開館の運びとなる予定です（次頁に完成予想模型写真）。ここでは、この新しい図書館を簡単に紹介をさせていたくとともに、はからずも開設準備に関わること

になつた経験の中から、今の子どもたちと本をめぐる状況、マルチメディア世界の広がりなどについて、とりとめのない雑感を書かせていただければと思います。

「国際子ども図書館」を設立する目的は、いくつかあります。大きくは二つに大別されます。一つは、子どもの本や読書に関する「資料・情報のナショナル・センター」としての役割を果たすことであり、もう一つは、子どもに開かれた図書館として、多くの子どもたちに本のおもしろさ、読書の楽しさを知つてもらう場となることです。

前者は、もつぱら「大人」の利用者（具体的には、研究者、教育関係者、図書館員、出版関係者、父母などの広範な方々が想定されます）に対するサービスといえます。国立国会図書館に納本される資料を中心に国内外の子どもの本や関連する資料を集めて、調査研究活動を支援します。ま

▲ 「国際子ども図書館」完成予想模型
(日建設計作成、写真提供)



た、大阪国際児童文学館などの専門機関の協力を得て、戦前期の古い子どもの本など日本国内の貴重な資料を探すことができる総合目録データベースや図書館や学校の現場での選書活動などに役立つ専門情報データベースを提供していくことも重要です。さらに、こうした資料提供や情報提供の基盤の上にたって、共同研究や研修活動、公共図書館の児童サービスの支援、国内外の子どもの本に関する専門機関・団体との連携協力、子どもの本を通じた国際交流プログラムなどのさまざまな活動を計画しています。これらの基盤サービスは、直接来館される利用者の方々だけではなく、インターネットなど急速に発展している情報ネットワークを通じた形での「電子図書館機能」を最大限に活用した提供をめざしています。

次に、「子ども」に対するこの図書館の役割ですが、その中心は直接来館する子どもたちに読書のおもしろさや図書館に触れるきっかけとなる「子どもと本のふれあいの場」を提供することになります。全面的に施設の改修が完成した段階では、「子ども室」「おはなし室」を開室する計画もありますが、必ずしも子どもたちの日常の生活の場ではない状況下でのサービス提供となることから、動物園や博物館が集中する上野公園という立地をできるだけ最大限に活用して、本の世界へ興味をいざなう展示会やイベントの開催を柱とした体験・参加型のサービスを企画、実施していくことを予定しています。

話は前後しますが、なぜ、このような施設が国立図書館の中につくられることが計画されるようになったのかといえば、子どもの本離れ・読書離れに対する危機意識が、その最大の理由であることは疑いようもありません。ここで詳しく紹介す

本に関わる民間団体や超党派の国會議員からの要望を受ける形で、国際子ども図書館の開設が決まり、準備が進められてきたわけです。

さて、これまでのわずかばかりの経験の中で、

私が印象を受けたことの一つは、子どもの本に関わる方々が持つていらっしやる「使命感」の強さでした。子どもの発達にいかに読書が大切であるか、本との出会いがかけがえのないものであるのか、といった「固い信念」が、この計画を推進する原動力となり、「熱い想い」に支えられながら、この計画がスタートを切ることができたことを痛切に感じます。子どもにとっての読書の意識については、いまさら私などが、何かを申し述べるのはおこがましてことですが、多くの識者の方々が言われるよう、乳幼児期からの「読み聞かせ」体験が、子どもたちの豊かな精神の糧となり、社会生活を営む基盤であることばを育むことにつな

がっていきます。おおげさな表現をすれば、子どもに本や読書の喜びを伝えていくことは、人類が積み上げてきた「文化」を次代に伝承していくための、もつとも基本的な文化活動の一つとしてとらえることがふさわしいのかもしれません。

先ほど、「子どもの本離れ、活字離れの深刻化」と書きましたが、子どもたちと読書の今を考える上で、急激に変化をとげつつある現今的情報環境やメディア状況を抜きに論じることはできません。実は、これまでの計画の具体化の中で、議論となつた難しい課題の一つが、情報デジタル化、ネットワーク環境の進展など「情報化社会」が進む現実の中で、「国際子ども図書館」はどうあるべきなのかといった問題でした。たとえば、映像メディアをどのように考えていくのかという問い合わせがあります。直接的な視覚イメージによる表現は、子どもたちにとつてわかりやすく、なじみ深



い性質があります。しかし、それだけに安易に映像によりかかることは、物事をじっくり考えたり、豊かな想像力を衰退させてしまう恐れがあるとする意見もまた多く目にするところです。「子どもと本の危機」を背景とする「国際子ども図書館」にとつて、映像を中心としたマルチメディア情報にどのような姿勢でのぞむべきなのか、さまざまに議論がわかれ、頭を悩ませ続ける難問です。これについて、簡単に結論はでないのですが、これまでの議論を踏まえた現在のとりあえずの方向性は、「ことば」の文化を中心としながらも、映像情報を安易に排除するのではなく、そのすぐれた特性が活かせる領域・場面での映像情報、マルチメディア情報の積極的な導入をめざしていくというものです。実際には、いうほどやさしいものではないとは思いますが、ことばによる文化と視覚イメージによる文化の両者が、子ども

の文化全体の中でのバランスよく発展していくすがたを願い、それに寄与するためのサービスを考えていこうとしているところです。

少し脱線しますが、私個人の意見としては、映像文化は重要で大切なものだという思いが強くあります。もちろん、刺激の強い視覚イメージには、子どもたちに安易に手渡してはいけないものもあるでしょうし、最終的には、人間社会のコミュニケーションがことばを媒介に成り立っている以上は、視覚イメージだけで伝達できるものにも限りがあると思います。それを踏まえた上で、これまで個人をこえて伝えていくことが難しかった



「視覚イメージ」による文化が、デジタル技術や情報ネットワークの発達によって、ようやく文化として、広く共有できる状況が生まれたことの意義を積極的に評価していくべきではないかと考えています。そして、これまでのことばの読み書きに加えて、映像情報を利用し使いこなす能力をどのようにして育てていったらよいかを真剣に考えなければならぬ時代を迎えていることを痛感します。私は、新しい時代の担い手となる子どもたちには、ことばの世界をこえた文化を限りなく発展させていくつと期待します。私の期待する国際子ども図書館とは、そのような新しい文化の担い手となる子どもたちの文化の拠点であつてほしいと思うものです。

とりとめのない紹介に終始して申し訳ないのですが、国際子ども図書館は、これから多くの期待に応えるべく、生まれ出ようとしています。もち

ろん、期待だけでなく、さまざまな批判も寄せられています。中には、国が上野に一つだけ立派な図書館をつくるお金があるなら、地域の図書館を充実させたほうが、よっぽど子どもの読書にとって役に立つではないかという厳しい意見までありました。準備に関わるものの一員として、この新しい図書館が、子どもと本をつなぐ運動の拠点として、また、子どもと本の豊かな出会いの場として、期待に応えていけるのかどうか、日々、不安と重い責任を感じつつ、資料の収集や新しい情報システムの開発など目の前の難題に取り組んでいます。できますれば、国際子ども図書館に多くの皆様の関心とご協力を寄せくださることを、心からお願い申し上げて、つたない紹介をおえることにします。

(国立国会図書館)